

## 『建礼門院右京大夫集』『源家長日記』

## 学習テーマ

今回は国公立大学二次試験の古文を扱う。記述問題なので内容を深く理解して解答する必要がある。というのも、**和歌に関する問題が出題されており、難易度が高くなっている**からだ。

また**問二**の口語訳の問題も、「適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ」とあるように、単純な現代語訳の問題ではない。

このレベルになると、**品詞分解を前提とした文法や単語の処理だけで解答しても合格点は取れない**。古文を読んで理解し咀嚼したうえで、現代文の問いに対して解答するくらいの気持ちで臨んでほしい。読んで理解するのと、そこから問いに対して解答するのだと、1対2以上の割合で解答作成に時間をかけるべきだろう。**合格点は30点だ。**

**問一** まず、歌までの流れをまとめてみよう。

五条の三位入道俊成が九十歳になると聞いた後鳥羽院が、長寿の祝いとして贈る僧衣の装束の袈裟けさに、歌を刺繍するということになった。そのお祝いの歌は宮内卿の殿に詠ませ、私が袈裟に歌を刺繍した：というもの。

その歌を解釈するポイントとしては、「誰が何に対して『うれしい』と感じたのか」だが、直後を読むと「袈裟をいただいたような人（＝俊成）の歌」とあるので、この歌は院から袈裟をいただいた俊成の感謝の気持ちを詠んだものと理解できる。さて、その歌を主語や目的語などを補って丁寧に解釈を試みよう。

**ながらへて けさぞうれしき 老いの波 八千代をかけて 君に仕へむ**

＝生きながらえて、院から祝いの袈裟を頂戴する今朝はうれしい。私（＝俊成）は年老いてはいるが、さらに長生きして院に仕えよう。

この歌に対して、私（＝建礼門院右京大夫けんれいもんいんきやうのだいふ）は「もう少し良くあるべきだ」と内心思ったが、命じられるままに刺繍を済ませた。するとその晩になって急に「けさぞ」の文字、「仕へむ」の「む」の文字を、「や」と「よ」にするべきであった、二条殿へすぐ参上して縫い直せという院からの命令が来たのだった。ある意味、予想通りだったわけで、やはり先ほど刺繍したあの歌は良くなかったわけだ。さて、「けさぞ」の「ぞ」の文字、「仕へむ」の「む」の文字を、「や」と「よ」に改めた歌を作って解釈してみよう。

**ながらへて けさやうれしき 老いの波 八千代をかけて 君に仕へよ**

＝生きながらえて、院から祝いの袈裟をもらえる今朝を俊成は嬉しく思っているだろうか。これからも長寿を保って私（＝院）に仕えなさい。

こうやってみると分かるのだが、「ぞ」を「や」に改めることによって、「強調」が「疑問」に変わり、「む」を「よ」に改めることによって、「意志」が「命令」へと変わる。

それによって一番大きく変化するのは、主語と目的語だ。最初の歌は「院から袈裟をいただいた俊成の感謝の気持ちを詠んだもの」だったのが、文字を改めることによって、「院が俊成に対する祝意を表したもの」へと歌の趣旨が大きく変わっている。こうすることで、「院が俊成にお祝いを贈った」という状況にふさわしい歌へと変化したといえる。

解答欄の大きさから考えると、縦二十五〜三十字×五〜六行程度書けるので、百五十字を目安にしよう。今までで最長の記述解答に挑戦することになるが、すでに本冊の第9講でやったようにポイントを箇条書きし、最初はやや長めの下書きをしたうえでまとめていくという点では同じ作業だ。一要素を十五〜三十字と考え、全体で百五十字とすると五〜八要素と想定して、うまくまとめて解答しよう。

下書き
<p>波線部Xの歌は、院から袈裟を頂いた俊成が自らの長寿を喜び、今後も長生きして院にお仕えしようとするもので、俊成の立場から院への謝意を表していたが、Yのように改めると、院が九十歳を迎えてお祝いに袈裟をもらった俊成の気持ちを尋ねつつ、今後も長生きして自分自身に仕えることを求めるといふ院の立場からの歌となり、このほうが俊成の長寿を祝う場面にふさわしい歌に変化した。(百八十字)</p>

解答
<p>波線部Xの歌では、自らの長寿を喜び、今後も長生きして院にお仕えしようという、俊成の立場から院への謝意を表していたが、Yのように改めると、九十歳を迎えた俊成の気持ちを尋ねつつ、今後も長生きして仕えることを求める院の立場からの歌となり、このほうが俊成の長寿を祝う場面にふさわしい歌に変化した。(百四十四字)</p>

配点
<p>配点 12点</p> <p>波線部Xの歌では、</p> <p>① 自らの長寿を喜び…1点</p> <p>② 今後も長生きして院にお仕えしようという…2点</p> <p>③ 俊成の立場から院への謝意を表していた…2点</p> <p>※③の要素の説明が間違えているものは①〜③まで全体0点。</p> <p>Yのように改めるど、</p> <p>④ 九十歳を迎えた俊成の気持ちを尋ねつつ…1点</p> <p>⑤ 今後も長生きして仕えることを求める…2点</p> <p>⑥ 院の立場からの歌となり…2点</p> <p>※⑥の要素の説明が間違えているものは④〜⑥まで全体0点。</p> <p>⑦ このほうが俊成の長寿を祝う場面にふさわしい歌に変化した…2点</p> <p>※「院が俊成の長寿を祝う歌としてふさわしいものに変化した」も可。</p>

**問二** 問いに「適宜言葉を補って」とあるので、そのあたりに気を付けながら現代語訳しよう。基本は品詞分解したうえで逐語訳だ。

ア「やがて／賀／も／ゆかしく／て、／夜もすがら／候ひ／て／見／し／に、」

重要単語としては、「やがて」「ゆかし」「夜もすがら」がある。

30

矢が的中、そのまますぐ死んだ

やがて＝そのまま 2すぐに

30

ユカ知りたい

ゆかし＝見たい。聞きたい。知りたい。読みたい。

30

余も菅原も夜通し遊ぶ

夜もすがら＝夜通し

このうち、「やがて」と「ゆかし」の二つが文脈判断の必要な語。まず「やがて」は1「そのまま」なのか、2「すぐに」なのかの判断が重要。ここでは、私が院のところに参上して文字を二つ刺繍し直した後、「やがて」賀宴が開かれた。私はその賀宴を見たいなと思った…という流れから、「すぐ」というよりも状態の連続である「そのまま」が適している。刺繍し終わったら「すぐに」賀宴が始まったというのは考えにくい。次に、「ゆかし」は「賀もゆかしくて」とあるように、俊成のために開かれた祝賀を私も「見たい」と思ったのである。

文法的なポイントとしては、「候ふ」は謙讓語の本動詞で「お仕えする・伺候する」、「し」は過去の助動詞「き」の連体形。「に」は接続助詞で、祝賀を見ていて昔を思い出したという流れから、ここでは単純接続「〜と〜ところ」。

以上に気を付けながら訳すと、「私は、そのまま祝賀も見たくて、夜通しお仕えして見ていたところ、」となる。

イは「いみじく／道／の／面目／なのめならず／おぼえ／しか／ば、」と品詞分解できる。

30

何の目？平凡な目、いや格別だ

なのめなり＝平凡だ 2いいかげんだ

形容動詞「なのめなり」は二つの意味があるが、ここでは「なのめならず」と慣用句で使われており、「平凡ではない」＝「格別だ。並一通りではない」の意になるところが最大のポイント。

次に、「道」というのが、ここでは「歌道」のことを指している点もポイント。「道」と文中に出て来た場合、いわゆる「人が通る道」という普通の意味以外で使われると、何か学問や芸道などの専門の方面を指すことになる。その場合の「道」は、1 仏道、2 歌道、3 書道、4 学問の道、などが考えられる。どれを指すかは文脈によるが、ここでは藤原俊成という歌道の大家の九十歳の祝賀であることを考えると、「歌道」と判断できる。ちなみに、問四の文学史問題もヒントになっている。「面目」は「世間に対する」名譽。「しか／ば」の箇所は、過去の助動詞「き」の已然形＋「ば」で順接確定条件なので、「たので」と訳す。

全体を訳してみると、「たいそう入道（＝俊成）の歌道の名譽が並一通りではないと思われたので、」ウは、「君／も／さ／ほど／に／許し／思し召い／たり／し、／返す返す／も／ありがたく／見／侍り／し」と品詞分解できるが、解釈にあたっては、まず人物関係を正確につかまないと難しい。

傍線部ウの直前に書かれているのは、亡くなった俊成がいかに後鳥羽院に信頼されていたかを示すエピソードだ。かつて水無瀬殿で行った歌合の判定時に、院が「俊成入道がこのように申した」と詞書に書いていた、とあるのは、院がいかに俊成の歌の才能を「許し（＝認め）」ていたかを示すものであり、それを知った私は、返す返すも「ありがたし」＝「めったにない（くらいすばらしいことだ）」と思っ

たのである。

**ありがたし算じゆる、めづらじつ。生きていらつ世の中だ**

ありがたし

- 1 めづらじつ
- 2 めつたにない
- 3 生きていくのが困難だ

POINT

こうした流れをつかみ、人物関係を押さえたうえで訳をすると、「院もそれほどに俊成入道の才能を認めていらっしやったことは、返す返すもめつたにない素晴らしいことだと思いました。」となる。「それほどに」の箇所が指示語なので、具体的に「判定の詞に書くほどに」としたほうが良い。なお「思し召す」は尊敬語「思（おほ）す」よりも一段高い敬意を表す語で、地の文では帝や院レベルの人が主語でなければ使われない。

エは「こ／の／人／ものし／給は／ず／は、／いかさまに／せ／まし／と／のみ／思ひ／あへ／り」と品詞分解する。ポイントは三点。①「この人」とは誰か、②「ものす」の訳、③「ずはくまし」の訳。まず流れとして、歌詠みの大家であった俊成入道が亡くなった後、もし「この人」がいてくれなかったら残された私たちはどうすればよかったか、きつと途方に暮れていたことでしょう…という流れをつかむことが大切で、ここでの「この人」とは、俊成入道の息子の「二郎の中將」、つまり藤原定家のこと。定家が、父に劣らぬ歌詠みであることが書いてあることをつかもう。

次に、「ものす」は代動詞でいろいろな動詞の代わりをするが、ここでは「ある・あり」の代わりに用いられている。

POINT

**「ものすゞイルカが来るので食べたくて行く」と手紙を書く**

- ものす＝いる・来る・
- 食べる・行く・手紙を書く、
- などの代動詞

最後に「ずはくまし」だが、これは反実仮想と呼ばれる大切な形だ。

POINT

反実仮想

反実仮想とは、**事実**に反する状態を仮定して、その場合に起こる事柄を**想像**する意を表す。次のような形がある。

ましか  
 ませ  
 せ  
 未然形

十ば くまし Ⅱ 仮にくだったとしたりくだろうに。

↓「ませば」は古い形で、中古以後は「ましかばくまし」が主に用いられた。また、「せばくまし」の「せ」は過去の助動詞「き」の未然形だが、「き」の未然形の「せ」はこの反実仮想でしか用いられない。さらに、「未然形+ばくまし」の形で反実仮想を表すことがあるが、注意したいのは、「形容詞の連用形+は（ば）くまし」と、「ずはくずんばくずばくまし」の形。

↓「形容詞の連用形＋は（ば）くまし」は、たとえば「うつくしくはくまし」のように、「くは（ば）くまし」の形で出て来る。

打消の助動詞「ず」の場合は、「ずは・ずんば・ずばくまし」の形を取るが、訳が大切で、「仮にくまなかったとしたらくまらうに」と、打消の意が入るのを忘れないようにしたい。

エを訳すと、「仮にこの二郎の中将（＝定家）がいらっしやらなかったとしたら、どうしたらよいだろうとばかり思い合っていた」。

解答	
ア	私は、そのまま祝賀も見たくて、夜通しお仕えて見ていたところ、
イ	たいそう入道（＝俊成）の歌道の名譽が並一通りではないと思われたので、 院も判定の詞に書くほどに俊成入道の才能を認めていらっしやったことは、返す返すもめったにない素晴らしいことだと思いました。
ウ	仮にこの二郎の中将（＝定家）がいらっしやなかったとしたら、どうしたらよいだろうとばかり思い合っていた。
エ	

配点

配点 各の点

ア ①「私は」…1点 ②「そのまま」…1点 ③「祝賀も見たくて」…2点

イ ④「夜通し」…1点 ⑤「お仕えて」…1点 ⑥「見ていたところ」…1点

ウ ①「たいそう」…1点 ②「入道（＝俊成）の」…1点

エ ③「歌道の」…1点 「名譽が」…1点 ④「並一通りではないと思われたので」…2点

ウ ①「院も判定の詞に書くほどに」…1点 ②「俊成入道の」…1点

エ ③「才能を認めていらっしやったことは」…2点

イ ④「返す返すもめったにない素晴らしいことだと思いました」…2点

※「判定の詞に書くほどに」を「それほどに」としたものは0点

エ ①「この二郎の中将（＝定家）が」…2点

イ ②「仮に」いらっしやなかったとしたら」…2点

エ ③「どっいたらよいだろうと」「…1点 ④「ばかり思い合っていた」…1点

**問三** 「なられにき」を品詞分解すると、「なら／れ／に／き」となる。直前の「はかなく」を含めて全体を訳してみると、「**俊成入道が** お亡くなりになった」と訳せるので、この訳を前提にして文法的な説明をしていくのが確実だ。

最初の「なら」は、「はかなくなる」＝「お亡くなりになる」と訳してみると分かるように、「く成る」という意味を持つので、ラ行四段動詞「成る」の未然形。

次に、「れ」は①受身、②尊敬、③可能、④自発の四つの意味を持つ助動詞だが、ここでは省略されている主語が「俊成入道」なので、「尊敬」。次の「に」が、完了の助動詞「ぬ」の連用形なので、この「れ」は連用形だ。

「にき」は助動詞の組み合わせとしてよくあるもので（複合助動詞という）、「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「き」は過去の助動詞「き」の終止形だ。

解答

「なら」は(ラ行)四段活用動詞「なる」の未然形、「れ」は尊敬の助動詞「る」の連用形、「に」「は」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「き」は過去の助動詞「き」の終止形。

配点

「なら」「れ」「に」「き」、それぞれの説明が完答で各2点×4

問四 文学史の問題。この程度であれば正解するだけの知識は確実に持っておこう。ゴロがあるので見ていこう。

藤原俊成 『千載和歌集』 『新古今和歌集』藤原定家

ゴロ

俊成君の洗剤、新定価

(A) このゴロを見ても分かるように、藤原俊成が撰者として編纂した勅撰和歌集は『千載和歌集』。藤原俊成は歌論として『古来風体抄』を書き、「幽玄」を和歌の理想とした。

(B) 院(後鳥羽上皇)の命によって二郎の中将(定家)らが編纂した勅撰和歌集は、『新古今和歌集』。藤原定家は歌論として『近代秀歌』『毎月抄』を書き、日記『明月記』を残した。父の俊成の唱えた「幽玄」を一歩進めて「有心体」を和歌の理想とした。

解答

(A) 千載和歌集

(B) 新古今和歌集

出典解説

『建礼門院右京大夫集』は鎌倉初期に成立した、歌数約360首の私家集。作者の建礼門院右京大夫と平資盛との恋の歌を中心とする内容になっている。平家の盛衰を語ったもので、女性の書いたもう一つの『平家物語』とも言われている。平清盛の娘、建礼門院徳子に仕えた。

『源家長日記』は、鎌倉前期の貴族・歌人である源家長の日記。源家長は『新古今和歌集』にも歌が採録されており、藤原定家との親交があったとされる。

問四	問三
A	<p>「なら」はラ行四段活用動詞「なる」の未然形、「れ」は尊敬の助動詞「る」の連用形、「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形、「き」は過去の助動詞「き」の終止形。</p>
B	
千載和歌集	
新古今和歌集	
3 × 2	

合格点  
30点

50

8

問二				問一
エ	ウ	イ	ア	
<p>仮にこの二郎の中将（  定家）がいらっしゃらなかったとしたら、どうしたらよいだらうとばかり思い合っていた。</p>	<p>院も判定の詞に書くほどに俊成入道の才能を認めていらっしゃったことは、返す返すもめったにない素晴らしいことだと思いました。</p>	<p>たいそう入道（  俊成）の歌道の名誉が並一通りではないと思われたので、</p>	<p>私は、そのまま祝賀も見たくて、夜通しお仕えして見ていたところ、</p>	<p>波線部Xの歌では、自らの長寿を喜び、今後も長生きして院にお仕えしようという、俊成の立場から院への謝意を表していたが、Yのように改めると、九十歳を迎えた俊成の気持ちを探ねつつ、今後も長生きして仕えることを求める院の立場からの歌となり、このほうが俊成の長寿を祝う場面にふさわしい歌に変化した。</p>
				12

6

4

〔I〕

建仁三年の年、霜月の二十日余りいく日の日やらむ、五条の三位入道俊成、九十に満つと聞かせおはしまして、院より賀賜はするに、贈り物の法服の装束の袈裟に、歌置かるべしとて、師光入道の娘、宮内卿の殿に歌は召されて、紫の糸にて、院の仰せごとにて、置きて参らせたりし。

ながらへてけさぞうれしき老いの波八千代をかけて君に仕へむ

とありしが、賜りたらむ人の歌にては、いま少し良かりぬべく、心のうちにおぼえしかども、そのままに置くべきことなれば、置きてしを、「けさぞ」の「ぞ」文字、「仕へむ」の「む」文字を、「や」と「よ」とになるべかりけるとて、にはかにその夜になりて、二条殿

〔I〕

建仁三年の年、十一月の二十何日だろうか、五条の三位入道俊成が、ちょうど九十歳になると後鳥羽院がお聞きになって、院から長寿の祝いをお与えになるが、贈り物の僧衣の装束の袈裟に、歌を刺繍なさろうということで、師光入道の娘である、宮内卿の殿に歌は命じて詠ませなされて、紫の糸で、院のご命令で、私がその歌を刺繍してさしあげていた。

ながらへて：「生きながらえて院から祝いの袈裟を頂戴する今朝はうれしい。私は年老いてはいるがさらに長生きして院に仕えよう。」

とあったが、袈裟をいただいたような人（俊成）の歌として、もう少し良くあるべきだと、私は内心は思われたけれども、そのまま刺繍するべきことなので、刺繍したが、「けさぞ」の「ぞ」の文字、「仕へむ」の「む」の文字を、「や」と「よ」になるべきであったとて、急にその晩になって、二条殿へすぐ参上せよという旨、院のご命令とて、範光の中納言の牛車といっ

へきと参るべきよし、仰せごととて、範光の中納言の車とてあれば、参りて、文字二つ置き直して、やがて賀もゆかしくて、夜もすがら候ひて見しに、昔のことおぼえて、いみじく道の面目なめならずおぼえしかば、つとめて入道のもとへそのよし申しつかはす。

君ぞなほ今日より後も数ふべき九かへりの十の行く末

〔II〕

今年建仁三年になむ侍る。その次の年の冬ごろに、限りあればはかなくなられにき。さばかり色にのみこそ染み深くものし給ひけむに、終はりも乱れざりけりとぞ聞こえ侍りし。あはれ、歌のたくみなりしさまはこの世にたぐひ少なくや侍りけむ。水無瀬殿に渡らせ給ひしころ、にはかに歌合ありて、八幡の若宮へ参らせ給ふこと侍りき。それ勅判にて侍りし。その御判の詞に、「俊成入道が申しき」

て迎えに来るので、私は参上して、文字を二つ刺繍し直して、そのまま祝賀も見たくて、夜通しお仕えして見ていたところ、昔のことが思われて、たいそう入道（俊成）の歌道の名譽が並一通りではないと思われたので、翌朝入道のもとへその旨を申し上げて贈る。

君ぞなほ：「あなたさまはやはり今日からのちも数えることができるに違いない。九十歳のその将来を。」

〔II〕

今年建仁三年でございます。その次の年の冬ごろに、寿命には限りがあるので俊成入道はお亡くなりになった。それほど風流事へのみ心を深く感じていらっしやうったとかいっているので、臨終も乱れなかつたなあと評判でございました。ああ、歌が巧みであったさまはこの世で匹敵するものが少のうございましたでしょうか。後鳥羽院が水無瀬殿にいらっしやうった頃、急に歌合があつて、その歌合を八幡の若宮に奉納なさるといふことがございました。それは院が判者をつとめるものでございました。その御判定の言葉に、「俊成入道がこのように申した」とお書きになってありましたか、院もそれほど入道の才能を認めてい

と書かせ給ひて侍りしか、君もさほどに許し  
思し召いたりし、返す返すもありがたく見侍  
りし。されどその二郎の中將、おほかた劣ら  
ぬとぞ申しあへる。げに詠み口の劣りは見え  
知り侍らず、下り立ちよろづに暗からぬ方は、  
いづくのけぢめには見え侍るべき。入道うせ  
られて後、この人ももし給はずは、いかさま  
にせましとのみ思ひあへり。

らっしゃったことは、返す返すもめつたにない素晴らしいこと  
だと思いました。けれどもその次男の中將は、父に全く劣らな  
いと私たち歌道に携わる者どもは申し合っている。なるほど詠  
みぶりの劣った所は見つけることができませんで、熱心にすべ  
てにおいて疎いことがない部分は、父入道とどこに区別がある  
と見えましようか。入道がお亡くなりになってのち、仮にこの  
二郎の中將（||定家）がいらっしゃらなかつたとしたら、どう  
したらよいだろうとばかり思い合っていた。